

家畜メディカルセンターの業務と私のライフワーク

伊藤隆晶[†] (愛知県農業共済組合連合会家畜メディカルセンター岡崎分室長)

愛知県農業共済組合連合会は、県下に、基幹診療所として家畜メディカルセンター（所在地：豊川市）を設置し、3カ所の分室として家畜メディカルセンター名古屋分室（所在地：名古屋市）、家畜メディカルセンター岡崎分室（所在地：岡崎市）、家畜メディカルセンター設楽分室（所在地：北設楽郡設楽町）を設置し、12名の獣医師が勤務している。

本会家畜メディカルセンターの主な業務は、家畜共済事業に関わる業務、産業動物（主に牛）の診療業務、疾病を低減及び生産性の向上を目的とする損害防止に関わる業務（損害防止活動）である。

愛知県での産業動物の診療は、従来、開業獣医師中心で行われてきた。しかし近年、家畜の過疎化により、中山間地域や都市近郊の無獣医化が進んだ結果、当センターが一部の診療を行っている。しかし、長距離となる往診、渋滞など交通事情の制約が非常に大きく、診療効率が非常に悪い状況である。高速道路など有料道路を使用しなければならないこともしばしばある。産業動物の診療に高速道路などの有料道路を使用する県は少ないのではないかと思う。

損害防止活動として実施しているものは、以下のようなものがあり、担当獣医師が業務を行っている。

①牛の呼吸器病対策活動

牛の呼吸器病の原因となる微生物の分離を行い、薬剤感受性を調査し、呼吸器病の低減を図る。

②乳牛の牛群検診

血液検査による血液性状の分析（代謝プロファイルテスト）、近赤外線分析装置を用いて実際に給与している粗飼料の成分分析、飼料給与状況及び生産状況の調査を行い、その農家の飼養管理の現状を把握し、問題点を発見することにより改善策を講じ、疾病の低減及び生産性の向上を図る。

③乳牛の乳房炎検診

その農家で搾乳している全頭全分房の乳汁等の細菌検査、搾乳手順・搾乳衛生・搾乳機器等の現状の調査を行い、問題点を発見することにより改善策を講じ、乳房炎の発生の低減、乳房炎の発生による農家が受ける経済的・労働的・精神的な損失（バルク

乳体細胞数上昇によりかかるペナルティー、牛乳の廃棄、生産される乳量の減少、治療費、牛の淘汰・更新など）の低減を図る。

④肉用牛の損害防止活動

ビタミンAを中心とした血液検査による血液性状の分析（代謝プロファイルテスト）、胸囲の測定、飼料給与状況および生産状況の調査を行い、その農家の飼養管理の現状の把握し、問題点を発見することにより改善策を講じ、疾病の低減及び生産性の向上を図る。

私は平成6年より、産業動物の診療業務のほかに、損害防止活動である乳牛の乳房炎検診を担当している。大学在学中から、微生物が関係する学問、獣医微生物学、獣医公衆衛生学等、それに関連する実習では非常に苦勞し、できるだけ避けてきた私にとって、この事業の担当になったときには嫌で嫌で仕方がなく、正直途方にくれた。しかし担当になった以上は仕方がないと割り切り、今更だが専門書を読み、先輩獣医師（主に北海道農業共済組合連合会の獣医師）に教えを受けて、さまざまな問題を抱えている農家で乳房炎検診を実施してきた。この活動を継続してきた中で、プロトセカ・ゾフィという微生物が原因となった乳房炎が問題となった農家を経験した。

このプロトセカ・ゾフィという微生物による乳房炎の調査・研究が、今の私のライフワークとなっている。

プロトセカ・ゾフィについては専門書には、以下のようない記載がある。

伊藤隆晶

— 略 歴 —

1993年 岐阜大学農学部獣医学科
卒業
同 年 愛知県農業共済組合連
合会入会
現 在 愛知県農業共済組合連
合会家畜メディカルセンタ
ー岡崎分室勤務



[†] 連絡責任者：伊藤隆晶（愛知県農業共済組合連合会家畜メディカルセンター岡崎分室）

〒444-0816 岡崎市羽根町字大池91-1 ☎0564-53-8811 FAX 052-204-0539

E-mail : itoh_taka@nosai-aichiken.or.jp

クロレラ属に近縁の葉緑素を欠く藻類で、池や河川、土壌などの環境中に常在し、高度に汚染された環境中より感染する経路が考えられている。牛に難治性の乳房炎を起こすことが確認されており、有効な治療法はないと報告されている。また、犬、猫そして人にもプロトセカ症を起こす人獣共通感染症で、近年プロトセカ・ゾフィによる牛乳房炎の発生は増加傾向にあると報告がされている。

今まで遭遇したプロトセカ・ゾフィ感染牛について、すべての感染牛が抗生物質による治療効果が見られず、難治性、慢性乳房炎で、最終的には、感染牛の隔離、感染牛の淘汰、感染分房の盲乳処置で対応してきた。私は経験がないが、プロトセカ・ゾフィ感染による急性乳房炎は北海道では発生しているようである。牛を取り巻く環境からプロトセカ・ゾフィが検出された報告があるので、牛を取り巻く環境を消石灰などで消毒すべきであるのかもしれないが、感染牛の隔離、感染牛の淘汰、感染分房の盲乳処置で対応することにより、新たな感染は見られない。

現在、プロトセカ・ゾフィについて、日本大学生物資源科学部獣医学科臨床病理学研究室と共同研究を行って

いる。牛を取り巻く環境にプロトセカ・ゾフィの存在の有無の調査を含め、感染源・感染経路等の疫学的調査、治療効果が期待できる抗菌性物質の薬剤感受性試験、治療効果が期待できる抗菌性物質の感染牛への応用の可能性の調査、有効な消毒剤及び消毒方法についての調査などを行っているところである。

抗生物質による治療効果が見られない難治性、慢性乳房炎は、プロトセカ・ゾフィの感染が疑われる。もし、乳汁の細菌検査を実施していないようならば、ぜひ実施すべきである。治癒の見込みのない乳房炎を治療している可能性があるからである。現実には私が遭遇したプロトセカ・ゾフィ感染牛はそのような経過であった。

日常業務に追われている当センターの獣医師たちは、忙しい中時間を作り、自分の興味・疑問に感じたことを調査・研究している。私の場合、日本大学生物資源科学部獣医学科臨床病理学研究室の方々からプロトセカ・ゾフィに興味を持ち、共同研究者になったことは、私の調査・研究を進める上で非常に幸運だと思っている。

ただし、私は未だに、微生物が関係する学問は苦手である。